

1

ホストクラブ奥の事務室のドアが、蝶ちようつがい番を弾き飛ばさんばかりの勢いで開けられる。

飛び込んだできたのは、ノータイでシャツの胸元を大きく開けたスーツ姿の、いかにもホスト然とした華やかな青年だった。つややかな淡色の髪の下で奥二重の目を爛々らんらんと光らせている。煽情的にたつぷりとした唇は厳しく左右に引かれ、まるで鼻先に喧嘩相手の顔でも突きつけられているかのような形相だ。

彼こそが二十五歳にして、巨大ホストクラブ『ファントム』をオープンさせた三枝桐斗さえぐさきりとだった。源氏名はカタカナで『キリト』という。

ソファでぐったりと横になっていた晶が起き上がろうとするのを、キリトは乱暴な手の仕種で、そのままいいと制した。

「肋骨、イカされたのか？」

荒い声で尋ねられて、晶が眉を八の字にして頷く。うなず

「たぶん……すみません」

「晶が謝ることじゃねえだろうっ」

言葉の内容とは裏腹、キリトの口調はひどく攻撃的だ。少年がビクツと身体を竦める。すく

「キリト」

圭祐は晶の向かいのソファから立ち上がって声をかけた。

剣呑とした光を撒き散らす眸が圭祐へと向けられ——視線が重なった途端、いくぶん頬の強張りを和らげる。

キリトは軽く仰向くと、胸に溜まった怒りを宙に放電するように天井へとひとつ息を吐いた。それから改めて圭祐に視線を戻し、見下ろしてくる。

「圭祐が晶を助けてくれたんだってな。ありがとな」

「いや。でも、たまたま通りがかってよかった。相手は暴力団風の男ふたりだった。片方は顎に大きな傷があったな。心当たりはあるか？」

「……」

キリトが苦々しい顔をした。そして晶に尋ねる。

「荻嶋組のヤツか？」

晶がおずおずと頷いた途端、またキリトの怒りのボルテージは跳ね上がったらしい。壁が拳でダンツと殴られる。

圭祐はキリトの忌々しい表情と固く握られすぎて白くなっている拳を見て、アルコールが入って感情的になっていただけでなく、おそらく継続的に『ファントム』と荻嶋組とのあいだで面倒が起こっているのだろ、うことを推測する。

キリトは晶と少し言葉を交わすと、女性客たちが待ち侘びているフロアへ慌ただしく戻っていった。晶のほうは近くの救急病院へと店の者に付き添われて出ていく。

圭祐は翌日の早朝に仕事が入っていない金曜の深夜は毎週そうするように、仮眠を取るため事務室の黒革のソファに横になった。

キリトの生活は、夕方起床してホストクラブ『ファントム』のオーナー兼ホストとして仕事をし、昼に就寝するというサイクルだ。

かたや圭祐はテレビ局勤務で、ウィークデーの二十二時からの一時間枠の報道番組を担当しているため、午前中に出勤して深夜の一時二時に仕事を終える。

キリトの定休日は水曜日。

圭祐の定休日は土日だが、休めるのは大概どちらか一日で、年末年始や番組改編時といった特番乱発期ともなれば休みは一切返上となる。

だからふたりが会うのは、キリトの週末の仕事上がりか、圭祐の水曜の仕事帰りか、ということになる。一日一緒に過ごすことは、まずなかった。

出会ったころはキリトが一時的にホストを辞めていたから、ふたりの生活サイクルは合い、夜食をともにつつき、一日の終わりの時間を共有することができていた……最近、ふとそのころがなつかしくなる。

ゆっくり一緒に過ごしたいなら、キリトに言えば週末に仕事を休んでくれる気はする。でも、

店をオープンして間もないなかでそんな要求をする気にはなれなかったし、そもそもそういう我儘^{わがまま}を言える関係性なのかもよくわからない。

毛布を軽く身体に掛けて天井に埋まった長細い蛍光灯を眺め、圭祐は軽く溜め息をつく。

——それでも、俺たちの始まり方を思えば、考えられないぐらいベタベタな関係だな。始まりは、悪夢としか言いようのない、最悪のものだった。

半年ほど前、東方テレビ報道センターに入った一本の電話。その電話でスクープがあると餌をちらつかされて赴いたホテルの一室で、圭祐はキリトに催淫剤を使われてセックスを強いられ、それを映像に収められてしまった。そしてキリトはその映像をネタに、圭祐にある復讐劇の共謀者になることを強要したのだった。

そんな屈辱と絶望に満ちたスタートだったにもかかわらず、キリトと接触を重ねるうち、圭祐はいつしか彼を受け入れてしまっていた……身体でも、心でも。

考えてみればキリトはホストを生業^{なりわい}にしている——しかも、『ファントム』勤務のホストやボーイたちの話によれば、キリトは歌舞伎町でも名うてのホストであるらしい——人の心を握^{から}め捕る技に長けて^たいるから、同性とはいえ自分が籠絡されたのもさして不思議なことではないのかもしれない。

「……まんまと嵌^はめられつづけてるな」

苦笑^{くしょう}して呟^{つぶや}き、目を閉じる。

あとで萩嶋組とのあいだにどんなトラブルを抱えているのかキリトに訊こう——万年過労状態の圭祐の意識は、すぐに深い眠りへと崩れ落ちていった。

唇に馴染んだ、うっとりするほど柔らかな感触。

下唇をコリコリと噛まれて、圭祐は重たい^{まぶた}瞼をうつすらと開けた。

「ん…」

また、押し被せるように唇が重なってくる。

夢から覚めやらぬなか与えられる夢見心地の快樂に、瞼をふたたび閉じる。圭祐は自分に伸し掛かっている青年の首筋に腕を回した。項に軽くかかるさりとした髪に指を擦める。

キリトの唇は見た目どおりの絶品だ。

しつとりとなめらかで、押しつければぷるんと弾む。その極上の唇からときおり舌が這い出してくる。唇を舐められると、とろりとした蜂蜜を唇に垂らされているかのような甘みが神経を侵す。

理性が目覚める間もなくキスに溺れて、圭祐はつい自分からも舌を出してしまう。

唇の外で、舌先同士が互いをちろちろとくすぐりあう。

今晩も、いったい何本のドンペリを女たちに開けさせたものか。キリトの肌からは麝香^{じやこう}とア

ルコールの入り混じった淫蕩な香りが立ち昇っていた。

たまらなくなった様子、圭祐の舌を押し込むようにしてキリトの舌が深く口のなかに入ってきた。彼の体重が全部かかってきて、ほどよい^{たくま}逞しさのある腕が圭祐の背中とソファのあいだに差し込まれる。

苦しいぐらい、抱き締められる。

「んっ…」

舌で弱い口蓋を探られて、圭祐は身体をビクツとさせた。

キリトとのキスは危ないぐらい、いい。

犯す本能を持つ男の、攻撃的なキスだ。積極的な女のキスともまた違って、蹂躪^{じゅうりん}される恥ずかしさを突きつけてくる。

圭祐のなかの、男としての、攻める側の性を屈服させる。

ずっとノーマルな性向だった圭祐にとっては、処理しがたい、心地悪さをともなう快楽だ。そう、とても心地悪いのに、これほどの快楽はない。

舌が抜かれる。圭祐は自分から顔の重なりをわずかにずらして忙しく呼吸した。口の端から唾液が細く伝い落ちていくのを指で拭う。

視線を上げれば、胸を衝かれるほど魅惑的な青年がじっと自分のことを見ている。

自分のように面白みもなく整っている顔より、こういう顔のほうがよっぽど訴えかける力を

持っていると圭祐は思う。

締めまりのある輪郭に、鮮やかに通った鼻筋、鋭さと甘える色が絡み合う奥二重の目。全体のバランスを崩しかねないほど肉感的な唇……その唇はいましがたのキスで濡れている。自分が濡らした、唇。ぞくりと甘い痺れが背を貫く。

それを見透かしたように、もう一度、顔が落ちてきた。

数秒、唇の表面が重なつて、離れる。

圭祐の目を覗き込みながら、キリトが悪戯いたずらっぽく笑う。

「なあ、この部屋の鍵かけてないんだけど、誰か入ってきちゃったら、どうする？ カミングアウトとかゆーの、しちゃうか？」

少し怪しい呂律ろれつで言いながら、圭祐の脚のあいだに腿を押し込んでくる。

圭祐は咄嗟とっさに腰を引こうとした。

「大丈夫……圭祐だけじゃないって」

キリトが囁ささやいて、圭祐の下腹に下腹を重ね合わせる。

「……あ」

耳元に寄せられた唇に尋ねられる。

「俺、濡れちゃってんだけど、圭祐は？」

「バカなこと……訊くな」